

## あいさつ表現における待遇関係把握：社会的属性 差の観点から

著者	中西 太郎
雑誌名	言語科学論集
巻	11
ページ	23-34
発行年	2007-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/48306">http://hdl.handle.net/10097/48306</a>

## あいさつ表現における待遇関係把握 —社会的属性差の観点から—

中西 太郎

キーワード：言語行動、待遇表現、あいさつ、属性差、荻野の数量化

### 要旨

本稿では、出会いの言語行動を数量化して得られた聞き手の位置づけについて、男女差、職業差、年代差、出身地域差といった社会的属性差別の観点で分析を行った。その結果、それぞれの観点で待遇関係の捉え方に明確な差異があることがわかった。例えば、中年層は、若年層・高年層と異なり、疎遠な目下の相手を、疎遠な目上の相手と同等くらいの心的距離の遠さで捉えているとわかった。そして、このような話者の捉え方の差異を把握することで、待遇表現の適切な運用とその解釈が可能になり、円滑なコミュニケーションを進めるための指針を示すことができる。

### 1. はじめに

本稿では、出会い時に行われる「あいさつ」などの言語行動は、他我の関係を明示する機能を持つ、との立場をとる。例えば、朝、「おはよう」と声をかける相手より「おっす」「おう」「よう」と声をかける相手のほうが親しい相手だということは一目瞭然である。このような「あいさつ」の機能の捉え方はことさら特異なものではない。Malinowski (1923)は、「あいさつ」について、「人間関係の絆を確立する役割を果たし、社会的地位などの重要な社会的情報を付与するもの」とその機能を指摘し、Laver (1975)にも「互いの役割を定義し構築しようとする機能を持つ」と指摘がある。これらの「社会的情報を付与する」、「互いの役割を定義する」といったところに関係表示としての「あいさつ」の性格が裏付けられている。そして、出会い時の行動の典型たる「オハヨウ」などのあいさつ言葉とは、出会い時に表すべき他我の関係概念が定着し、それを言語化し、他我の関係の維持や確認を簡潔に遂行するために定型化した言葉である、と捉えている。日本の「あいさつ」研究において、その関係表示の機能は、沢木・杉戸(1999)や坂本(1999)

などの指摘する待遇表現性という性格のなかに窺える。しかし、実際のデータに基づいた分析や、それが何を表しているかといった研究は、管見の限り乏しい。

著者の目的は、それぞれ定型化したあいさつ言葉やそれを含む出会い時の言語行動には、それをもって表したい距離感や社会的関係があると捉え、言語の運用に関わる待遇関係の把握がどんな有り様か、を記述することにある。

よりわかりやすく問題を示そう。例えば、「オハヨウ」というあいさつがくれた表現だということが記述されているとしよう。しかし、そのような記述からは、どんな範囲の相手までがくれた表現「オハヨウ」を使って遇すべき相手か、ということはわからない。これは言語の運用に関わる問題で、個々の言語行動の性格を述べるのと同様に重要な問題だと考える。中西(2006)では、そのような問題意識にのっとり、出会い時の表現で表し分けられる言語運用上の待遇関係把握がどのようなものかを明らかにした。

しかし、さらに一步踏み込むとすれば、その“くれた表現「オハヨウ」を使って遇すべき相手”の認識とは、一樣なのか、人によって差異がないものか、という観点も考えうるだろう。本稿は、そのような問題意識にのっとり、拙稿(2006)の結果をより詳細に分析し、男女差、職業差、年代差、出身地域差といった観点から、言語運用上の待遇関係把握にどのような差があるか、ということをも明らかにする。

## 2. 調査概要

調査は仙台でおこなった。東北地方の中核都市として位置づけられる仙台は、多様な人々が交わる都市型の生活形態を有し、言語行動が表し分ける複雑な人間関係の差異を観察するのに適していると考えられる。

調査では、“日記調査法”という手法を採用した。インフォーマントに記入する項目を印字した調査票(表1を綴ったもの)を渡し、インフォーマントが第三者と出会ったときに交わした言語行動を随時記録してもらうものである。この手法は、長谷川(2000)や田中(1985)、東山(1982)などの先行研究で行われてきた調査法に比して、限りなく実態に近いデータを長期間得ることができ、かつ当事者間の関係も記録できるという利点がある。調査期間については、任意の連続する1週間分のデータを採取してもらった。

表 1. 出会いの言語行動記述調査票

月日	月 日
時間	AM / PM 時 頃
場所	
自分の挨拶	
相手	関係 (                      ) 上 / 同 / 下 親 / 疎
相手側挨拶	
順番	1. 自分 → 相手 2. 相手 → 自分 3. その他 (                      )

表 2. インフォーマント構成

	学生	社会人
男性	11 人	11 人
女性	9 人	10 人

分析データ総数：1632 場面

調査対象者 41/55 人：回収率 74.5%

調査期間 2003 年 7 月～8 月、  
 2004 年 3 月～10 月、  
 2005 年 3 月～8 月

調査票には上下意識、場所、時間など出会いの言語行動を左右する要因を項目として設定したが、本稿では“自分の挨拶”と“親疎”“上下”が分析対象となる。

### 3. 分析

出会いの言語行動は、あいさつ言葉のみならず複数の表現から成り立っている。本稿の分析では、出会いの言語行動を各要素単位で抽出したものを扱う。例えば、

あ、こんにちは。お久しぶりでございます (軽く会釈)

といった文は、「あ」/「こんにちは」/「お久しぶりでございます」/「(軽く会釈)」を 1 つ 1 つの要素とする。また、「あいさつ」に反映する待遇表現性をすくいそこねることのないよう「敬体/常体」による区分、変種の統合を行った。例えば、「オツカレ～」という表現は、「敬体/常体」の対立にもとづいて以下のように分けられる。なお、敬体と常体の分類は「デス」「マス」といった文末敬語形式を基準にした。

ex. 「オツカレ」常体： オツカレ、オツカレー、オツカレサマ、オツツー

「オツカレ」敬体： オツカレサマデシタ、オツカレサマデス、オツカレサンデス、オツカレデス、ドウモオツカレサマデス

6 通りの相手 (親疎 2×上下 3) に対する使い分けの様相は、次頁表 3 の通りである。

表3.【親疎×上下】場面別の各言語行動の使用状況

形式	上 親	上 疎	同 親	同 疎	下 親	下 疎	総 計	形式	上 親	上 疎	同 親	同 疎	下 親	下 疎	総 計
オハヨウ敬体	154	99	40	17	28	21	359	ヨロシク敬体	0	5	0	0	0	1	6
オハヨウ常体	32	0	163	17	68	27	307	ジャア	1	0	3	0	2	0	6
コンニチハ	86	43	26	24	19	21	219	イッテキマス	4	0	2	0	0	0	6
金釈 <sup>1</sup>	38	31	23	14	11	19	136	名乗り敬体	1	2	1	1	0	0	5
お辞儀 <sup>1</sup>	37	54	3	10	5	7	116	軽くお辞儀 <sup>1</sup>	1	1	0	0	2	1	5
コンバンハ	14	17	10	2	13	3	59	ゴブサタ敬体	4	0	1	0		0	5
オツカレ敬体	20	10	3	3	4	2	42	アリガトウ敬体	2	0	0	1	1	1	5
ヒサシプリ常体	2	0	15	2	4	3	26	手をあげる	0	0	4	0	0	0	4
笑顔	1	2	12	3	7	0	25	ハジメマシテ	0	3	0	1	0	0	4
実質常体 <sup>2</sup>	3	0	9	2	10	0	24	スママセン	1	3	0	0	0	0	4
ゴク로우敬体	1	0	0	7	2	14	24	イラッシャイ常体	0	0	4	0	0	0	4
ハイ	2	3	2	2	3	9	21	礼 <sup>1</sup>	1	0	0	1	1	0	3
オッス	0	0	14	0	6	0	20	ヤア	1	0	1	0	1	0	3
オツカレ常体	3	0	8	3	2	4	20	モシモシ	3	0	0	0	0	0	3
タダイマ	16	0	1	0	2	0	19	アリガトウ常体	0	0	1	0	1	1	3
目礼 <sup>1</sup>	0	3	5	5	1	4	18	【親族呼称】	2	0	1	0	0	0	3
オウ	0	0	13	1	3	1	18	ヨロシク常体	0	0	0	0	2	0	2
イラッシャイ敬体	6	11	1	0	0	0	18	サヨウナラ	1	0	0	1	0	0	2
ウッス	1	0	9	2	1	5	18	オサキ常体	0	0	0	0	1	1	2
ドウモ	6	1	5	0	4	1	17	オカゲサマ	0	0	0	1	0	1	2
【名前】+ワン/クン	2	0	0	0	2	12	16	エエ	0	1	0	0	0	1	2
手をふる	2	0	13	0	0	0	15	うなずき	0	0	2	0	0	0	2
ヒサシプリ敬体	7	3	1	2	0	1	14	イイヨ	0	0	0	0	2	0	2
オセワニ〜敬体	2	8	0	0	2	1	13	【名前】	0	0	1	0	1	0	2
オサキ敬体	6	0	2	2	1	2	13	名乗り常体	1	0	0	0	0	0	1
軽く金釈 <sup>1</sup>	0	6	0	4	0	1	11	ワン	0	0	1	0	0	0	1
その他の動作	2	0	1	0	7	1	11	ヤッホー	0	0	0	0	1	0	1
オセワサマ敬体	0	3	0	2	5	1	11	マタ常体	0	0	0	0	1	0	1
実質敬体 <sup>2</sup>	6	1	0	1	1	1	10	マタ敬体	1	0	0	0	0	0	1
安否敬体	7	0	0	1	2	0	10	ドーゾ	0	0	1	0	0	0	1
視線	5	1	2	0	1	0	9	ドウモ	0	0	0	0	1	0	1
シツレイシマス	3	4	1	0	0	1	9	シバラク敬体	1	0	0	0	0	0	1
ゴク로우常体	0	0	0	2	0	6	8	キタツケテ	0	0	0	0	1	0	1
【なし】	0	2	0	2	4	0	8	オヤスミ	0	0	0	0	1	0	1
安否常体	1	0	1	0	3	2	7	オカエリ敬体	0	0	1	0	0	0	1
オカエリ常体	2	0	1	0	4	0	7	ウン	0	0	0	0	1	0	1
イッテラッシャイ	1	0	0	0	6	0	7								

総数 N=1790, 欠損値=359

中西(2006)では、このようにして統合したあいさつ表現のバリエーション 72 種と 6 通りの相手 (親疎  $2 \times$  上下 3) に関して、荻野の数量化を行った<sup>3</sup>。その結果、言語運用上の待遇関係把握については、目上で親しくない相手をもっとも心理的に遠い位置づけとして待遇し、以下、親しい目上、親しくない同年代の相手、親しくない目下、親しい同年代、と順に近い相手として待遇している、ということが明らかになった。

本稿では、話者の属性別に各相手への使用実態の集計結果を出し、それに対して、数量化を行う。そうすることで、属性別の、相手への待遇的な捉え方の差が浮かび上がってくることになる。

表 4. 属性別場面数

		上・親	上・疎	同・親	同・疎	下・親	下・疎
性別	男性	233	163	164	88	113	121
	女性	251	164	246	56	131	60
職業	学生	250	155	259	80	63	47
	社会人	234	165	153	84	166	134
年代	若年層	287	212	287	87	71	49
	中年層	119	100	66	6	68	5
	高年層	78	16	56	53	103	127
出身	東北	311	194	205	58	180	125
地域	他地域	173	133	205	86	64	56
	場面総計	484	327	410	144	244	181

観点別に総場面数 = 1790

このように、属性別に集計した場面数に、72 種の語形それぞれの使用状況をクロスする。つまり、親疎  $\times$  上下の 6 場面について、学生 / 社会人とといった話者の属性ごとの使用頻度数を表したクロス表が得られるのである。男女差については、 $72 \times 6 \times 2$  で 864 セルのクロス表ができる<sup>4</sup>。その表について荻野の数量化を行い、各々の場面についての待遇度を求めた。男女差、職業差、出身地域差については  $6 \times 2 = 12$  場面を 12 までの数値の待遇度の中に位置づけ、年代差については  $6 \times 3 = 18$  場面を 18 までの数値の待遇度の中に位置づけることになる。

### 3. 1 相手の位置づけの男女差

図1は、男女それぞれにとっての相手の位置づけを表している<sup>5</sup>。数直線の左には、男性の話者にとっての6聞き手の心理的距離の位置づけ、右は女性にとっての6聞き手の心理的距離の位置づけ、といった具合である。それぞれの相手の待遇度は、どのような丁寧度を持つ言語行動がその相手に用いられるかという実態から定められる。数直線の値が高いほど待遇度が高く、その聞き手は心理的に“遠い”位置づけだと解釈する。例えば、男女共に、【上・疎】という相手が、もっとも心理的に遠い位置づけだということが読み取れるが、女性のほうが【上・疎】という相手を若干遠く位置づけているということがわかる。なお、この心理的距離の遠さというのは、当然、言語行動の使い分けに直結してくる。例えば、男性の【上・親】と女性の【下・疎】は、9～10の間の比較的近い値をとっている。これは、男性が目上で親しい相手に会った時と、女性があまり親しくない目下の相手に会った時にする言語行動のパターンが似ているということを意味している。例えば、男性が、【上・親】の相手に「オハヨウゴザイマス」と普段言うなら、女性も【下・疎】の相手に対して「オハヨウゴザイマス」と声を掛けうる、ということである<sup>6</sup>。

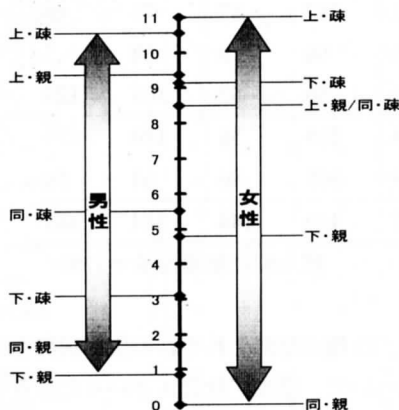


図1. 〈男女別〉の相手の位置づけ

図1を見ると、矢印の長さの違いから男性に比べ女性のほうが待遇関係を捉える幅が広いことがわかる。待遇関係を捉える幅が広いとは、他我の社会的関係を、言語行動や形式の違いを利用してより明示的に表し分けられているということを意味する。つまり、ここでは、相手による出会いの言語行動の使い分けの差が顕著だということである。

また、男女で相手の位置づけの順序が大きく異なることが目につく。

男性は、【上・疎】【上・親】が高い値でまともまっていることから、まず目上を心理的に大きく遠くに位置づけるといえる。同年代以下については、{【同・疎】【下・疎】【同・親】【下・親】}という順序から、親疎で“疎”と捉えられる相手を選び分け、心理的に遠くに位置づけていると解釈できる。その上で、親しい相手・

親しくない相手について目下を同年代より近くに位置づけていると分析できるだろう。

女性は目上で親しくない相手が最も遠い位置づけになる点と男性と同じだが、次に目下の親しくない相手、それに次いで、ほぼ同じ程度で同年代の親しくない相手、目上の親しい相手が位置づけられている点が注目になる。【上・疎】【同・疎】【下・疎】が8以上と高い値を示していることから、女性はまず疎の相手を遠くに位置づけるといえる。また、【下・疎】【上・親】【同・疎】の値は相対的に近いので、それらの相手にはほぼ同じような言語行動を行っていることがわかる。

そして、もう一つ特徴的な点は、親しい相手・親しくない相手、それぞれについて共通で{上>下>同}という値の大きさを示すことから、男性と異なり、同年代をより内側に位置づけている、という点であろう。その位置づけ方を分析するならば、まず、自分との年代の差に基づいて“同年代/その他の年代”とカテゴライズし、同年代を近い位置に位置づける。そして異なる年代に分類にされた上下については社会的関係に基づいて目上を外に置くという把握を行っていることがわかる。

### 3. 2 相手の位置づけの職業差

次に職業差について分析を行う。ここでいう職業差とは、社会人と学生の対比である。このような観点をを用いるのは、今までの出会いの言語行動の分析においてその使用実態に顕著な差異が認められたためである。

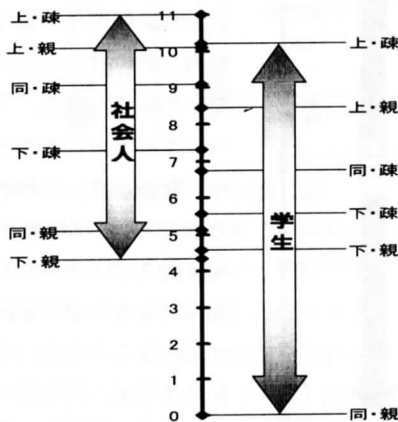


図2.〈職業別〉の相手の位置づけ

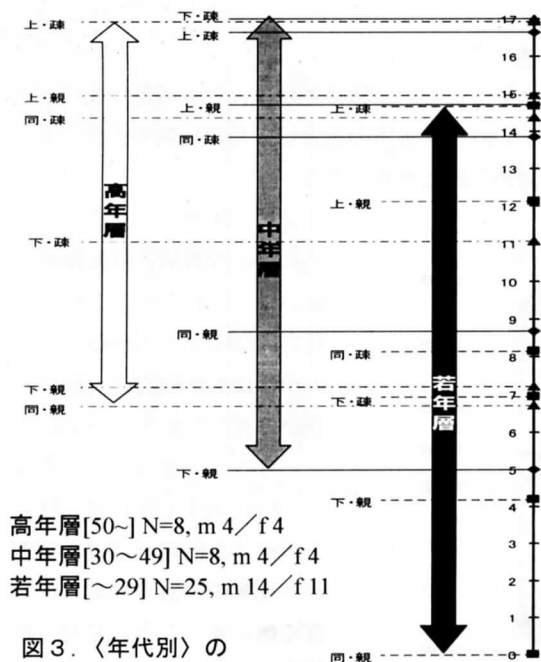
まず、社会人は、学生に比べて大幅に待遇関係の把握域が狭いことがわかる。これは、社会人は学生に比べると、どの相手にも比較的に一様な出会いの言語行動を行っているということを意味する。さらに、【下・親】を除けば、社会人の相手の位置づけは、学生の同項目の位置づけより、大きく値が高いことが見てとれ、社会人の方が全体として相手



を遠くに位置づけると解釈できる。出会い時の言語行動という点で言うなら、社会人の方がより丁寧度の高い形式を用いて相手を遇するということである。例えば、社会人の【同・疎】が9、学生の【上・親】が8.5という値になっている。つまり、社会人は、疎遠な同年代の相手に対して、学生が目上で親しい相手にする言語行動より丁寧な言語行動を行う、ということである。そのように全体を比較すると、社会人は、【下・親】の場合を除いて、同じ相手に、学生のときより一段階ずつ言語行動の丁寧度を上げて、出会いの言語行動を行っているといえる。

また、社会人の相手の位置づけ順は男性のそれと同じだが、学生は異なっている。学生は、【下・親】より【同・親】の値が大幅に小さい。親しいと感じる相手については、目下よりも同年代に、顕著にくだけた表現を用いるということである。が、親しくない相手に関しては、値が小さい順から{【下・疎】【同・疎】【上・疎】}となっていることから、上下意識にしたがって位置づけ、丁寧度に沿った言語行動をしているといえる。

### 3. 3 相手の位置づけの年代差



まず、矢印の長さに注目することで、年代があがるにつれて待遇関係の把握が狭まっていることが見てとれる。つまり、年をとるにつれて出会いの言語行動による社会的関係の表し分けが明示的でなくなるということである。また、全体についてみると、若年層の矢印の範囲が0~15程度であるのに対し、中年層5~17、高年層7~17と値が高く、矢印が大きな値の範囲をとっていることから、若年層より中年層・高年層のほうが、相手を待遇的に遠くに

位置づけるといえる。したがって、用いる言語行動の丁寧さという点では、若年層に比べて、中年層・高年層のほうが相手を丁寧に遇するということがわかる。

個々の聞き手の値に注目すると、値の間隔こそ異なるが、高年層と若年層では、内側から【同・親】【下・親】【下・疎】【同・疎】【上・親】【上・疎】と、相手の位置づけの順番が一致していることが特徴として指摘できる。特徴的なのは中年層だが、【上・疎】とともに【下・疎】が最も遠い段階として位置づけられている。言語行動の面では、疎遠な目上の相手を遇するときと同じくらいの丁寧さの形式をもって、疎遠な目下の相手にも対応するということであり、単純に目上に丁寧な言語行動を行うばかりでは自然な対応とはならない、ということを示唆する興味深い事実である。また、【同・親】の位置づけが若年層・高年層よりやや遠く、むしろ【下・親】が相対的に大きく内側に位置づけられている。

### 3. 4 相手の位置づけの出身地域差

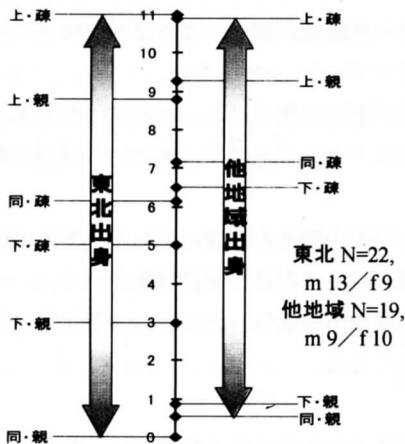


図4. 〈出身地別〉の位置づけ

の値がほぼ同じという点である。概略、出身地の違いによる相手の位置づけ順、その幅に大きな異なりはないと判断できる。ただ、他地域出身者は東北地方出身者のそれと比べて【下・親】の値が小さい、すなわち大きく心理的に近い所に位置づけているという点は注意しなければならない。また、他地域出身者は、【同・疎】【下・疎】の値が近く、【下・親】【同・親】との間に大きな差があるのに対し、東北地方出身者は、【同・疎】【下・疎】【下・親】【同・親】が比較的等間隔で並

個々人の言語運用の指針、その地域差というのは、俚言などの目に見えてわかる形式の差異に比べてその差が見えにくい。本節は話者を出身地域ごとのデータに分け、その待遇的な捉え方に差がないか検証するものである<sup>7</sup>。図4は、東北地方出身者とその他の地域出身者の相手の位置づけの違いである。

図4を見て、第1に指摘できるのは、相手の並び方が同じで、上限の【上・疎】と下限の【同・親】

んでいる点も特徴として指摘できる。他地域出身者は、同年代や目下の相手に対しては、親しいか親しくないかで大きくその位置づけを変えると読み取ってよいだろう。

#### 4. まとめ

本稿では、出会いの言語行動を数量化して得られた聞き手の位置づけについて、属性別の観点で分析を行った。その結果、以下の事実が明らかになった。

##### 〈男女差〉

- ・ 女性は男性に比べ待遇関係の把握域が広く、多彩な出会いの言語行動のバリエーションを用いてより明示的に社会的関係を表し分けている。
- ・ 男性が社会的な上下関係を大きく重視して待遇関係把握を行っているのに対し、女性は親疎に力点をおいて待遇関係把握を行っている。

##### 〈職業差〉

- ・ 社会人は学生に比べ大幅に待遇関係の把握域が狭く、どのような相手にも学生より一様な出会いの言語行動を行っている。
- ・ 社会人の方が全体として相手を心的に遠く位置づける。ゆえに、社会人は、学生のときより一段階ずつ言語行動の丁寧度を上げて、出会いの言語行動を行っている。
- ・ 学生と社会人では、親しい同年代、年下の捉え方に違いがある。学生は同年代を年下より大幅に心的に近く位置づけ、くだけた言語行動を行う。
- ・ 年代があがるにつれて待遇関係の把握域が狭まり、出会いの言語行動による社会的関係の表し分けが明示的でなくなる。

##### 〈年代差〉

- ・ 若年層より中年層・高年層のほうが相手を心的に遠く位置づけ、相手を丁寧な言語行動で遇する。

##### 〈出身地域差〉

- ・ 東北地方出身者と東北以外の地域の出身者の待遇的な相手の位置づけ順、幅に大きな違いはない。だが、同年代・年下の待遇関係の把握については明確な違いがあり、他地域の出身者は親疎で言語行動を大きく使い分ける。

これらの分析結果によれば、話者の属性ごとの待遇関係の把握の違いに沿って、

同じ相手に対してでも、どんな言語行動が自然かということの判断が変わるということになる。

図3の年代別の分析結果を例に挙げて具体的に説明しよう。若年層は、同年代や目下の相手であれば概ねくだけた言語行動をしてもよい、ということになるが、中年層になると、目下や同年代であっても疎遠な相手には目上の相手とほぼ同等の丁寧さの言語行動を用いるのが自然だということになる。そういった意味で、これらの差異の記述は、出会い時に自然なあいさつや言語行動を行い、円滑なコミュニケーションへ進んでいくための指針たりうるだろう。

本稿の分析で、出会い時の言語行動に窺える、話者の属性差に伴う待遇関係把握の差異が明らかになった。このような捉え方というのは、普段接する人的環境の中で、誰を待遇的に高く認識しそれを言語に反映し分けているか、その現れだと捉えられる。それは積み重なって、その社会で誰を遇すべきか、という社会の価値観を組み上げていく。そしてそれはまたフィードバックされ、社会の構成員の価値観を作りあげる。となれば、当然、価値観の動態が、それを表す言語形式にも影響を与えるはずである。本稿は、言語行動に投射される社会集団の価値観を記述し、それとの相互の関係の中で、「あいさつ」のような人の捉え方を示す表現の変異を論じる試みの一歩である。筆者は、このような視点こそが、ひいては、人の捉え方を示す表現がなぜ変わるかといった問いへの答えにつながると考えている。

課題として、今回得られた結論は、あくまで仙台の少数のインフォーマントの実態に基づいているということにはくれぐれも留意しなければならない。今後、調査地域の拡大を図り、日本語全体の待遇関係のあり方と関係表示の表現の様相について明らかにしていきたい。

## 注

- 1 「会釈」「お辞儀」「目礼」「礼」に関しては、一見その区別が明確ではないが、話者の一人は「お辞儀」や「会釈」などの違いについて、お辞儀はたちどまうて深々と礼、会釈は軽く頭を下げる、目礼はしっかり目を合わせて軽く頭を下げる、と弁別していたので、本稿では使い分けの点で差異があるという可能性を重視し統合を行わなかった。
- 2 「実質」とは「実質的表現」のことで、「お腹減った」や「飯行きます?」といった、伝達的意味を持つ会話の内容に入っていくような表現を指す。

- 3 荻野の数量化の手法は荻野(1983)を参照されたい。
- 4 今回は紙面の都合上、語形の丁寧さのクロス表、およびその丁寧度には触れない。語形の並びは、値の解釈にも関わるが、今回取り上げた観点(男女差・職業差・年代差・出身地域差)ごとの語形の並びは、それぞれが、概略丁寧度を基準に並んでいると判断するにやいものである。
- 5 数直線の最大値 11 という値は“場面数-1”という比例変換によるものである。
- 6 本稿では、男女の使う同形式の言語行動に丁寧度に差異がないものとして分析を進めている。このような考え方には異論もあろうが、仮に男女間で形式の丁寧度が大きく違っていたとすると、待遇的コミュニケーション上で必ず齟齬が起きるはずである。しかし、それが現実には円滑に行われている、ということ踏まえ、ここでは男女で形式の丁寧度は変わらないという前提に従っている。
- 7 調査は仙台を中心に行ったため、話者の出身地域は東北地方に偏っている。本稿では、出身地域という観点で、潜在的に運用指針に差があるかないかを問題とするため、データ量のバランスをとる便宜上、東北地方出身者対他地域出身者という括りを採用した。

## 参考文献

- 荻野綱男(1983)「待遇表現の数量化」林四郎・荻野綱男・田中幸子・樺島忠夫著『朝倉日本語講座 5 運用 I』朝倉書店
- 甲斐陸朗(1985)「現代日本語のあいさつ言葉について」『国語国文学報(愛知教育大学)』42
- 坂本恵(1999)「待遇表現としての「あいさつ」森田良行教授古稀記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』
- 沢木幹栄・杉戸清樹(1999)「世界のあいさつ言葉の対照研究に向けて—あいさつ言葉への視点」『国文学解釈と教材の研究』44-6 学燈社
- 鈴木孝夫(1975)「あいさつ論」『ことばと社会』中央公論社
- 田中望(1985)「外国人の日本語行動—会話のオープニングストラテジー—」『日本語学』4-8
- 東山安子・ローラフォード(1982)「あいさつにおける言語行動と非言語行動の日米比較」『月刊言語』11-13
- 中西太郎(2005)「出会いの言語行動と親疎意識」『言語科学論集』9
- 中西太郎(2006)「あいさつ表現における言語運用上の待遇関係把握」『社会言語学会第 18 回大会発表論文集』
- 長谷川頼子(2000)「出会いの言語行動における多様性の形式的分類」『筑波応用言語学研究』7
- Laver, J. (1975) Communicative functions of phatic communication. In A Kendon, R. M. Harris & M. R. Key (eds.), *The organization of behavior in face-to-face interaction*. The Hague: Mouton. 215-238.
- Malinowski, B. (1923) The problem of meaning in primitive languages. Supplement to C. K. Ogden & I. A. Richards, *The meaning of meaning*. London: Routledge and Kegan Paul. 146-152.